新響129

アマチュアオーケストラ
新交響楽団第129回演奏会

指揮：原田幸一郎
ヴァイオリン独奏：漆原 朝子

ベートーヴェン
コリオラン序曲
Op.62 1807

シベリウス
ヴァイオリン協奏曲
ニ短調Op.47 1903

チャイコフスキー
マンフレッド交響曲
ロ短調Op.58 1885

1990
10.21(日) サントリーホール2:00pm

アマチュアオーケストラ
新交響楽団第129回演奏会

ベートーヴェン：コリオラン序曲 作品62

Ludwig v. Beethoven：Coriolan Overture, 1807

シベリウス：ヴァイオリン協奏曲ニ短調 作品47

Jean Sibelius：Violin Concerto d-minor, 1903

第1楽章　Allegro moderato
第2楽章　Adagio di molto
第3楽章　Allegro

休　憩

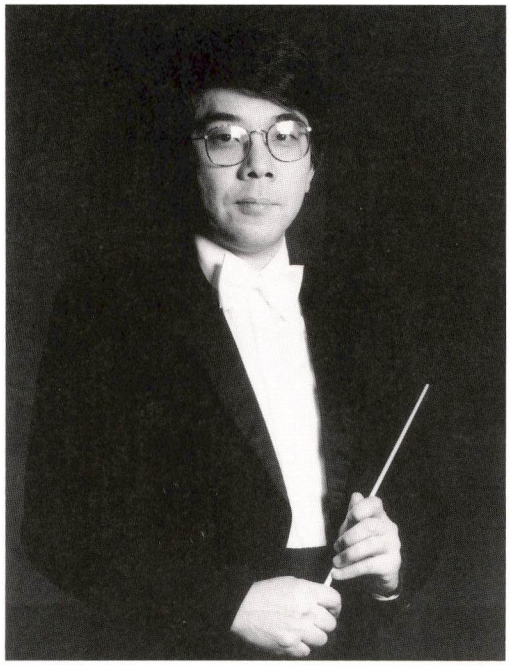
チャイコフスキー：マンフレッド交響曲ロ短調 作品58

Peter I. Tchaikovsky：Manfred Symphony b-minor, 1885

第1楽章　Lento lugubre/Moderato con moto/Andante
第2楽章　Vivace con spirito
第3楽章　Andante con moto
第4楽章　Allegro con fuoco

1990年10月21日(日)2:00 p.m.
サントリーホール
主催：新交響楽団

原田　幸一郎 ――指揮者プロフィール



1945年生まれ。桐朋学園とジュリアード音楽院で齋藤秀雄、秋山和慶、ドロシー・ディレイ、イヴァン・ガラミアン氏らにヴァイオリンと室内楽および指揮法を学ぶ。

69年から12年間、東京クヮルテットの第１ヴァイオリンを務め、世界の桧舞台で常に高い評価を受けてきた。81年に東京クヮルテットを離れ、クリーヴランド音楽院のヴァイオリン科主任教授とイェール大学、アスペン音楽祭でも教鞭をとりつつ、室内楽奏者として、ニューヨークのリンカーン・センターやワシントンDC等のコンサートで広く活躍。

83年から日本に居を移し、ソリストおよび室内楽奏者として内外で活躍。さらに86年には数住岸子と“NADA”室内楽シリーズをスタート、従来にない高度なアンサンブルを誇っている。

88年４月、九州交響楽団の〈モーツァルト定期〉で指揮デビューを飾り、翌月の新日本フィル〈ハイドン定期〉の東京デビューも好評を博した。さらに桐朋学園のオーケストラをたびたび指揮するほか、今年も〈ハイドン定期〉への再登場、〈倉敷音楽祭祝祭合奏団〉等を指揮。

現在、桐朋学園、東京芸術大学で教鞭をとる。国際的に高く評価されている名手で、日本の音楽界、特に室内楽の分野での今後の貢献に大きな期待が寄せられている。

漆原　朝子 ――独奏者プロフィール



４歳よりヴァイオリン、５歳よりピアノを始める。1982年東京芸大附属音楽高校に入学し、同年第51回日本音楽コンクール第２位、また83年第２回日本国際音楽コンクールで優勝（同時に日本人作品最優秀演奏賞）。85年東京芸大入学、同年東京文化会館小ホールにてデビューリサイタルを行う。86年より文化庁芸術家在外研修員としてニューヨークのジュリアード音楽院に留学。87年にはベルリンでベルリン・フィルの首席奏者との室内楽およびソロ演奏会を行い、好評を博す。88年１月、ニューヨークにおいてヤング・コンサート・アーティスツ・インターナショナル・オーディションに優勝。88年に帰国してN響９月定期演奏会でデビュー。89年にはマールボロ音楽祭に参加、ルドルフ・ゼルキンと共演した。これまでにヴァイオリンを西岡育子、阿部靖、故東儀祐二、故鷲見三郎、海野義雄、大谷康子、徳永二男、原田幸一郎の各氏に師事。N響、都響など多くのオーケストラとの共演やリサイタル等を行う。90年ジュリアード音楽院卒業。D.ディレイ、川崎雅夫の両氏にヴァイオリンを、F.ギャリミア、S.サンダース、M.ギャレット、ジュリアード弦楽四重奏団の各氏に室内楽を師事した。90年６月、英国リバプールにてロイヤル・リバプール・フィルと共にメンデルスゾーン他の協奏曲をレコーディング。同年11月モービル音楽賞奨励賞を受賞した。

使用楽器：ストラディヴァリウス“ジュースト”（1705年製・第一不動産より貸与されているもの）

ベートーヴェン

「コリオラン」序曲

作曲年代：1807年

楽器編成：フルート２、オーボエ２、クラリネット２、ファゴット２、ホルン２、トランペット２、ティンパニ、弦５部

コリオレーナスの想い出

この美しいホールで、十月になり金木犀が薫る頃になると定まって見かける初老の紳士がいた。今日は何時からか幸福そうに連れだって演奏会に来るようになったフランス人形のような少女を傍にしていることを人々は観ることができた。

葡萄のモティーフが刺繍された真紅の背もたれのついた木製の椅子に、彼は比較的緩慢と腰を降ろすと、研ぎ澄まされた眼差しで楽員が揃いはじめた舞台を眺め、呟く。――「コリオランか・・・何もかもみな懐しい――。」彼は1983年、東京渋谷の或るホールでの演奏会を想い出していた。「私のフィルハーモニカーは素晴しかった！（ウィーン・フィル）あのマーツェル（マゼール）でさえ、慈愛に満ちた第二主題では涙乍らに指揮を執っておった。コンサートマスターは・・・確かキュッヒルじゃったのう」

彼が若く美しい恋人・宇乃と音楽の小径を巡った1980年代、ベートーヴェンは衰退していった。時まさに“音”の世界であったともいえよう。しかし乍ら、否、だからこそ彼はこの孤高の楽聖の、それも取り分け重厚な楽曲を愛した。「コリオラン、エグモント、レオノーレ――素晴しいオウヴァチューア（序曲）はみな片仮名五文字じゃ・・・」

また、フリーメイスンであったが為に（彼は某石材会社の取締役会長だった）、“３”という数字に異常なまでの興味を示すようになったのも、この頃からであった。「コリオランはツェーモール（ハ短調）、♭が三つじゃ。何と崇高な指導性を示唆していることか――噫、あの荘厳な冒頭のインパクトは如何ばかりか――真摯な第二主題直前の苦悩の喘ぎはどうじゃ。エロイカも第五ズィンフォニー（交響曲）も♭三つ、そうじゃ、七番は♯が三つのイ長調じゃった。ニ短調大交響曲（合唱付）など駄作じゃな」何時の間にか、ちょっぴり偏執狂になって少女に語りかけていた彼であった。

「おじさま？」少女は銀鈴の様な可愛らしい声で相手をする。「でもおじさま、マゾゥーアさん（マズア、子供に変な言葉を教えてはいけません）がドイツ統一をお祝いして指揮なさった程の素敵な曲でしょ？　ニ短調の足りない♭二つは、緩りの綺麗な楽章にあるわ。フィナーレだってニ長調だから、おじさまのお好きな“三つ”ではないけれど、残りの♯一つはスケルツォにあるでしょう？」と、あどけない顔をほんのり上気させた。

「でも、矢張りベートーヴェンて暗あい。お葬式みたいぢゃない。あの人の“勝利”って、いじけてしまった寂しい心の裏返しなのね・・・」初老の紳士に似た鳶色の瞳を少し曇らせたその少女は、もう大人の仲間入りをしたかの様な風情であった。

開演を告げるベルが鳴った。彼は少女の言葉に困ったような優しい笑顔を浮かべ、ちらっとその横顔を見遣った（「近頃めっきり宇乃に似てきたわい・・・」）。嬉しさと、それから十月の悲しみが彼の心に交錯した。

幾分緊張気味の楽員の前で、まるで昔一流のヴァイオリニストであったかの様な指揮者が、棒を煌めかせた。

コリオレーナスが、聞こえた。

――FIN――

（Fg. 稲田　祥）

シベリウス

ヴァイオリン協奏曲

作曲年代：1903年

楽器編成：フルート２、オーボエ２、Ｂクラリネット２、ファゴット２、Ｆホルン４、Ｆトランペット２、トロンボーン３、ティンパニ、弦５部

「シベリウスを演奏するにはフィンランドの厳しい自然を知らねばならない」シベリウスに強い関心を持っていたカラヤンが小沢征爾にそう言ったと聞きます。その言葉の是非はさておき、フィンランドは、国の最南端に位置する首都ヘルシンキでさえアラスカのアンカレッジとほぼ同緯度にあるほどで、確かにその厳寒たるや半端ではないに違いありません。同時に森や湖の清らかな美しさ、ロシアやスウェーデンに苦しめられてきた歴史的背景による愛国の情なども、シベリウスの音楽の重要な要素です。

このヴァイオリン協奏曲は、シベリウス38歳の頃の作品で、２年後に１度改訂されています。ヴァイオリン協奏曲を作曲する際、例えばメンデルスゾーンはフェルディナンド・ダーヴィトに、チャイコフスキーはコテック

に、ブラームスはヨアヒムにというように、親しいヴァイオリニストに演奏上の技巧について相談する場合が多いのですが、シベリウスはヴァイオリニストを志した時期もあり、誰にも相談することなくこの難しい名曲を書きあげたのでした。不思議にもシベリウスは他に協奏曲と名の付くものは全く書き残していません。また、この唯一の協奏曲もなかなか支持を得ず、やっと人気が出てきたのは作曲後30年ほど経た後のことです。ところがそんなツライ過去が信じられないほどこの曲は魅力的で、北欧情緒に溢れています。

第1楽章：Allegro moderato

弱音器を付けた弦楽器の *pp* の伴奏をバックにG音で始まる冒頭のソロヴァイオリンの息の長い旋律は、こよなく清冽で、寂しくて、冷たくて、これだけでシベリウスが好きになってしまう人も多いことでしょう。2回のカデンツァ、6度による *espressivo*、ヴィオラ・ソロとのかけ合い、終結部 *vivace* など1楽章のみでも聞きごたえがあります。

第2楽章：Adagio di molto

木管の数小節の伴奏の後、ゆったりとした暖かい旋律が奏されます。楽譜にはこの旋律をG線のみで奏するよう指示があるのですが、その最上音は開放のG線より2オクターブ近く高いF音で、かなりハイポジションの音を要求されます。

第3楽章：Allegro, ma non troppo

土俗的で威勢の良いリズムで貫かれており、高度のテクニックを要する楽章です。難しいとわかっていながら、テンポの良さにつられてさらったりすると、大抵の人は、まず期待を裏切られることなくひどい目にあいます。とりあえず指がつること位は覚悟しておいた方が良いでしょう。

さて、昨年の新響の秋の演奏会では、チェロ・毛利伯郎さんと、指揮・原田幸一郎さんの組み合わせによるドヴォルザークの協奏曲が大好評でした。今年も、現在広くご活躍中の若い漆原朝子さんの感性と、もともとヴァイオリン奏者である原田さん（時に天は二物を与えたもうものなのですね）の感性のすばらしい溶け込みを期待できそうです。オケの皆さんは、ソロに聞き入ってしまって出忘れないよう注意しましょう。（Vn. 山口　佳子）

チャイコフスキー

マンフレッド交響曲

作曲年代：1885年

楽器編成：ピッコロ1、フルート2、オーボエ2、コールアングレ1、Aクラリネット2、Bバスクラリネット1、ファゴット3、Fホルン4、Dトランペット2、Aコルネット2、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ、シンバル、大太鼓、タンブリン、トライアングル、タムタム、鐘、ハープ2、ハルモニウム（オルガン）、弦5部

(1)　新響とロシア・ソビエト音楽

現在、日本には多くのアマチュア・オーケストラが存在するが、そのなかでも私達の“新響”はロシア・ソビエト音楽を演奏する機会が多い。

労音時代（1965年2月）にチャイコフスキーの「悲愴交響曲」のレコード製作。1967年9月にはソビエトのハバロフスク、イルクーツク、モスクワ、レニングラードへの演奏旅行に出かけ、このメイン・プロもチャイコフスキーの第5交響曲であった。1975年6月、アマチュア・オーケストラとして初めてストラビンスキーの「火の鳥」「ペトルーシュカ」「春の祭典」の3部作を一気に発表した。1986年7月にはショスタコービッチの交響曲第4番の日本初演を実現した。

これは創立以来30余年にわたり音楽監督であった芥川也寸志先生の影響力が大きい。彼はアレクサンドル・チェレプニンの弟子である伊福部昭氏に作曲を師事した関係で、彼の作品にはプロコフィエフやショスタコービッチのようなロシア的リズムを感じるところもあった。また戦争中でも高水準を維持したソビエトの音楽界にあこがれがあったことも事実であり、小生が慶応中等部の生徒のころ（昭和23年）音楽担当教諭として芥川先生からよくソビエトの現代作品のレコードを聞かせていただいた。モーソロフの「鉄工場」やカイノウスの作品「ドニエプル川の水力発電所」という管弦楽曲で音楽の時間に感想をのべたりしていたのを覚えている。

新響が演奏したロシア・ソビエト音楽は次の通りである。イワノフ「酋長の行列」。グリンカ「ルスランとリュドミラ」序曲。ボロディン「中央アジアの高原にて」「ダッタン人」。カバレフスキー「組曲・道化師」。ハチャトリアン「ガヤーヌ」。ムソルグスキー「組曲・展覧会の絵」。R. コルサコフ「交響組曲・シェヘラサード」。ショスタコービッチ「祝典序曲」「交響曲第4、第5、第7、第11」。チャイコフスキー「白鳥の湖」「眠りの森

の美女」「くるみ割り人形」「スラブ行進曲」「イタリー奇想曲」「ロメオとジュリエット」「バイオリン協奏曲」「交響曲第４、第５、第６（悲愴）」、今回の「マンフレッド交響曲」、そしてアンコールの小品等である。そのためか私自身も自然にロシア・ソビエト音楽に親しみ、好きになってきた。最近ではソビエト音楽家の友人も増えてヘルソンスキー教授や指揮者のM. ヤンソンやD. キタエンコ等と楽しい音楽の話しをする機会が多くなってきたことは嬉しいことである。

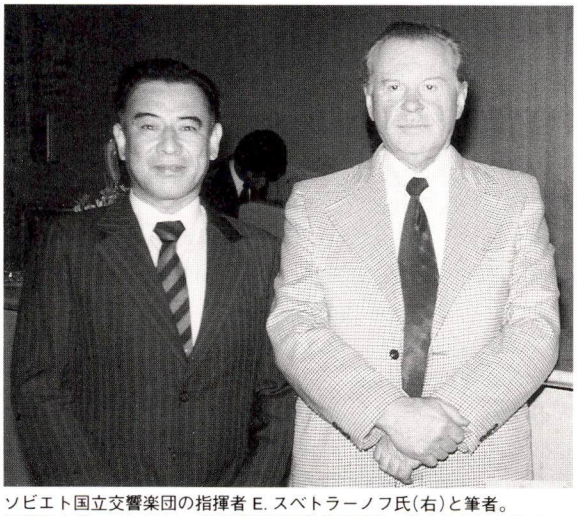
(2) “マンフレッド”を選曲した動機

① 長時間（LP）レコードが開発されたころ米国ビクター社は初めて“マンフレッド”を録音した。それは1949年12月、名指揮者アルトゥーロ・トスカニーニとNBC交響楽団のすばらしい演奏で、この作品が如何に優れているかを知らせた最高のレコードで、40年たった今日でも忘れられぬ名演であった。しかし当時の輸入LP盤は高額で一枚3500円であった。大学出身者の初任給が8000円ぐらいのころで、しかも朝からレコード店で並んで買った思い出もある。そのため、有難みも大きいし、一曲ずつ真剣に聞いた。最近はステレオ盤やCDに多くの指揮者が腕をふるって録音しているが、トスカニーニ盤を追い越す名演はまだ出ていないようだ。

トスカニーニはチャイコフスキーの交響曲を「マンフレッド」と「悲愴」の２曲しか録音していない。彼曰く「これは私の好きな交響曲で、“マンフレッド”は歌手のいないオペラである」と語っている。

② 次は1987年５月13日、本場のE. スベトラーノフ指揮のソビエト国立響による実演で、このとき初めて“マンフレッド”の本物を聞いた感動は大きい。超満員のサントリーホールで指揮者E. スベトラーノフは、この作品に真正面から取り組んだ。この音楽会では正統的なロシア音楽と、その風土、風景、人々の生活、スラブの歴史がこの交響曲の中から力強くあふれ出てきた。チャイコフスキーの美しいメロディー、エレガントなロシア美人、また原色的な色彩感を誇る演奏で、これこそが「ロシア的」な味わい、すべてが“ロシア語で”語られている名演奏であった。

日本のオーケストラでも数回聞いたことがあるが、技術的にも精神的にも難曲で、そのうえ約１時間の大曲であるためか、ともすると「くたびれ儲け」になってしまう。勿論アマチュアはまだどこも演奏していない。是非“新響”で演奏したい。友人の松木茂さんがモスクワ土産として「ソ連製スコア」をくださったので私は隅々まで愛読して、今回のチャンスを待っていた。幸いにも新



ソビエト国立交響楽団の指揮者E. スベトラーノフ氏（右）と筆者。
1987年５月、マンフレッド交響曲の演奏会終了後、都内のホテルにて。

響のメンバーがこの案に大賛成してくれた。弦楽器、金管、木管、打楽器も新響向きと考えられる。力強いパワーと叙情的なメロディー、技術的にも一級品で、みごとなオーケストレーションであることに魅力があったからである。

また今回の指揮者に迎えた原田幸一郎さんが、この大曲を如何に消化し、如何に音画を語り、劇的にこの交響詩を表現されるか？　それとも内面的にチャイコフスキーの晩年の悲劇性を格調高いすばらしい墨絵のカルティーナとして精神的に表現されるかが、今日の一番の楽しい聞きどころとなるであろう。

(3) 作曲の経緯

“マンフレッド交響曲”は彼の交響曲第４番と第５番の間の1885年に作曲され、深遠なる哲学的内容をもつ、悲劇的な晩年の作品となった。

“マンフレッド”はイギリス人バイロンの詩による４つの音画（カルティーナ）をもつ交響曲、作品58番で、ミリー・バラキレフに献呈された。

バイロンの詩を用いる着想はバラキレフによるものであるが、バイロンの“マンフレッド”はR. シューマンの作品に密接に結びつけられているため、チャイコフスキーはなかなか作曲に取りかかる気持にはならなかった。

しかし彼は「作曲に専心することを約束する」と1884年11月29日バラキレフ宛に手紙を書いている。翌年３月、彼はバイロンの詩をフランス語で読み直して４月にはモスクワ郊外マイダノヴォ村で作曲に取りかかった。

バラキレフのプランは４つの情景からなる交響組曲で

あり、そのすべてに主人公が登場するものであった。その考えをチャイコフスキーは受け入れ、“人生の意義や人間の運命”についての難題に喘ぐ“マンフレッド”の苦悩に重点を置いた。

苦悩するマンフレッドのイメージは最初の楽章で、まっ先に胸に浮かんでくる。一方他の３楽章は音画や物語の性格をもっている。ここで初めてチャイコフスキーは全曲を通じて繰り返される「固定楽想」の手法を用いた。その二つの動機は主人公の二面的性格を示している。即ち沈んだ瞑想と熱烈な抗議である。その「固定楽想」は第１楽章で極めて念入りに仕上げられており、コーダの再現部は特に圧巻である。

この曲における叙情的挿入部はマンフレッドの死んだ愛人アスタルテ（第１楽章・第４楽章の中間部の主題）やマンフレッドの眼前に現れるアルプスの仙女（第２楽章）のイメージに結びついている。

チャイコフスキーはこの曲について２人に手紙を書いている。①バラキレフ宛（1885年９月13日）「この交響曲の作曲には苦労したが、夢中になって作曲している喜びはひとしおであった。」②兄弟のモデスト宛（1885年12月９日）「私は、それが自分の最高傑作であるとますます確信している」

スコアは1885年９月22日に完成したが作曲過程で直面した困難や自分の新しい作品に満足の意を表明している。だが1888年には第１楽章だけで作品の考えを充分に達成しているとみなし、ひとつの楽章の交響詩に変えようとしていたが、実現は出来なかった。

(4)　初演

初演は1886年３月11日、M. エルマンドルフェル指揮・モスクワ・ロシア音楽協会の第11回定期演奏会。その２日後バラキレフ宛とN. フォン・メック宛に手紙を書いた。「聴衆は難解な作品で理解しそこなっている。しかし演奏家はリハーサルを重ねる毎に、その音楽が好きになり各楽章が終るたびに絶賛している」

聖ペテルスブルグ初演は1886年12月27日、アントン・ルービンシュタイン指揮のロシア音楽協会、第５回定期演奏会であった。

1886年12月31日に雑誌「音楽評論」でチェサール・キュイはチャイコフスキーの“マンフレッド交響曲”を賞賛。「特に第１楽章は絶品と言えよう。思想の深遠さ、展開部の完全性、オーケストレーション等はチャイコフスキーの最高傑作である」と語っている。（Leningrad 1949, Julia Rosanova、御舩銅　訳）
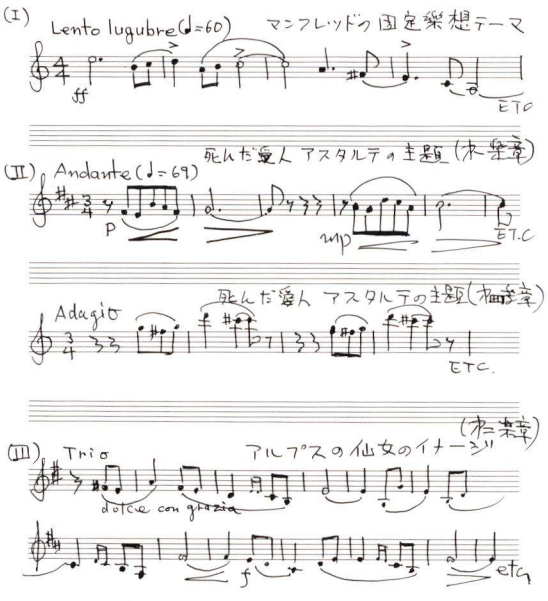
(5)　４つの楽章に該当する構成とその物語

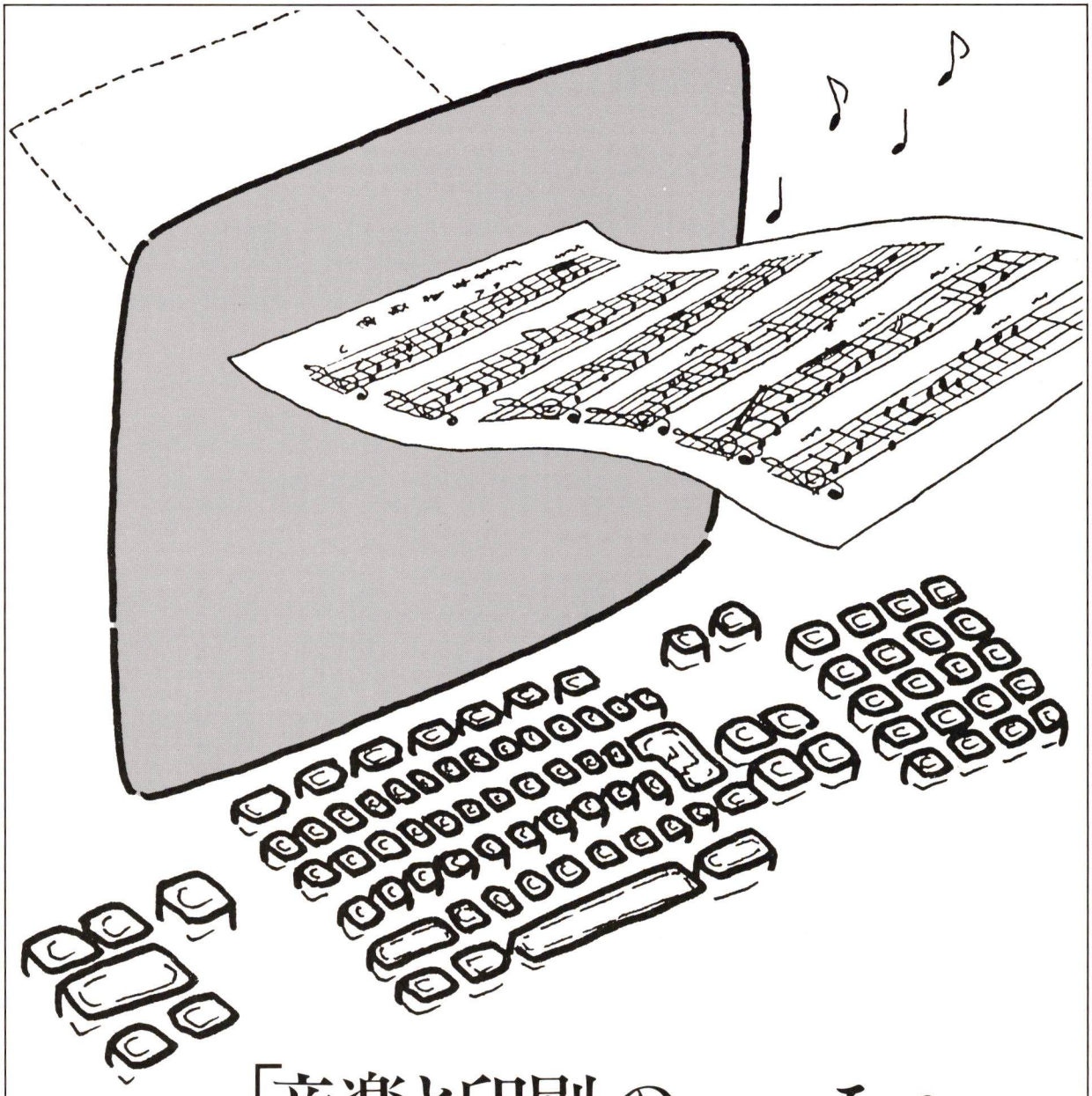
- 第１楽章　序奏部（レント・ルグーブレ）。
  主部（モデラート・コン・モート、ソナタ形式）。
  コーダ部（アンダンテ・コン・ドゥオーロ）。
  マンフレッドの苦悩は山中で出会った魔女の力を受けても解決を見ず、やがて彼は絶望に陥ってゆく。
- 第２楽章（スケルツォ・ヴィヴァーチェ・コン・スピリト）。
  アルプスの仙人が美しい虹の下に立ち、マンフレッドの前に姿を現わす。
- 第３楽章（アンダンテ・コン・モート、ロンド形式）。
  仙女の素朴な生活と牧歌的風景。
- 第４楽章（アレグロ・コン・フォーコ、自由な形式）。
  山神アリマネスの住む地下宮殿の場面。その饗宴に現われたマンフレッドは、今は亡き恋人アスタルテの亡霊を呼んで自らの罪の許しを乞うが、彼は死をもって安らぎを得られぬことを知る。

壮大な構想や規模からすれば、これはベルリオーズの「幻想交響曲」やリストの「ファウスト交響曲」等の標題音楽的交響曲に匹敵する大作である。

フルスコア初版　1886年２月
ピアノ・デュオ版　1886年４月
ピョートル、コルゲンソン出版

（Vc. 石川　嘉一）





「音楽と印刷」のハーモニー

いま、あらゆるジャンルの音楽が、私たちの生活の潤いを演出しています。
その音楽の世界にも、DNPの最先端技術が活躍しています。たとえば、楽譜づくり。いままでは、多くの時間と労力がかかりましたが、今では、DNPのCTS(コンピュータ・タイプセッティング・システム)が総譜からパート譜まで瞬時にディスプレイ上に描き出すようになりました。
そしてDNPはマルチメディア時代を迎え、画像や映像と音楽のイイ関係にチャレンジしています。

DNP
大日本印刷


21世紀へ、
音楽のある地球を
贈ります。
心を豊かに、気持ちを弾ませ。
時には励まし、時にはなぐさめ。
そんな素敵な音楽を、守り続けて
いきたい。21世紀も、もっともっ
とずっと先も。この地球が、音楽
のある星であってほしいから。
JASRAC
日本音楽著作権協会
理事長　石本 美由起
〒105 東京都港区西新橋1-7-13 ☎(03)502-6551